

奨励

「神のこの愚かな選択」



樋口和彦
大学神学部教授

〆一九九六年度、同志社には四十二人の教職員が入社しました。この奨励は、四月二日に行われた「入社式」で述べられたものです。〃

皆様、ご入社おめでとうございます。

この場にお集まりの皆様方の中には、これからお話し致しますキリスト教の礼拝の中での奨励とか、説教というものに、余り馴染みのない方もおられると思いますが、これを端的に申しますと、「人間の言葉の中に神の言葉を聞くこと」であります。

つまり、私の拙い人間としての言葉の中に、何か神の言葉として、皆様方の新しい門出にあたって、心に響くものがあつたらそれこそ幸いです。

この私も今を去る三十五年前の一九六一年にこの同志社に入社しました。

そして、皆様がご入社になったこの年に、私は同志社を定年で去る最後の年をいま迎えているところであります。

そこで、いわばこの同志社での教師としての生活の総決算のつもりで、今までの同志社での長い月日を振り

返りつつ、約百二十年前に神の名によって建てられたこの学園に働くものとして、何が大切かを、教師として私の体験をふまえつつお話したいと存じます。

まず、私が痛切に今感じていますのは、この同志社というキリスト教主義学校というものは、世にいうミッシヨンスクールとは違って、キリスト教を標榜する信者と非キリスト者とが共に協力して作り上げる共同体として成立しているという事であります。一見すると、当たり前前に聞かえますが、実はこれは中々容易ではありません。よく考えてみると、たとえその方がどのように宗教を信じていようと、また、いまいと、その人が選ばれて、あるいは自ら進んで同志社人となり、その大切な人生の何年かを、またある人にはその繰り返しのない貴重な何十年をこのキリスト教主義の教育に捧げる訳ですから、誰しも真剣たらざるをえません。

私の拙い経験からいえば、もとよりクリスチャンが熱心であるのは当然ですが、むしろかえって、クリスチャンでない方がキリスト教教育に熱意をもって当たられることが多いように感じられました。つまり、キリスト教主義の教育というものは、両者が緊張的な関係で切磋琢磨することによって成立するものです。

そこで、従って同志社はまずこよなく世俗的な側面をもっている事実を私は否定することはできません。その歴史の何をとってみても、同志社騒動、財政的な苦境、戦時下の迫害、戦後の発展の時代など、わが国の私学の諸学校と全く同じ性質をもっていて、これに何の幻想も抱く事はできません。最近に退職された先輩の教師のお一人の方が「まことに同志社は自由で居心地がよく、ややともすると、凭れあいの感がある」と、おっしゃいましたが、本当だと思います。

つまり、良い点でもあり、また欠点でもあります。このような見方は、人間が同じ人間に向かってどのように見ているか、と同じで、たえずわが国を代表する教育機関として評価を受けているのであります。努力して諸学校が常に誇れる私学としての独自の地位をこの社会の中でもたなければなりません。

幸いにして今日まで我々の先輩の諸兄が明治以来苦心して、その日本の私学として優れた歴史を築いて今日

に至っております。これを感じなくてはなりません。

しかし、これからの二十一世紀にむけての教育は、大変な変革の時期に入るといわれています。その様な時にご参集の皆様という新しい血をこの同志社が迎えすることは先にいる者として何よりも嬉しく思います。

われらの学校が何よりも自由で、創造性豊かで、一人一人の固有の人権を守る教育の場所であり、また何よりも嘘をつかず、責任をもって事に当たる人格はもとより、人間として品格を重んじる精神や、学問の府としては何よりも最高の「知」である賢さを求める所である必要があります。聖書に「真理はあなたたちを自由にする」(ヨハネ福音書8:32)とあります。

しかし、それだけでは、唯のよい学校に過ぎないと思います。この同志社の教育には、もう一つの次元があります。それはいわば垂直の次元です。人間の目にはよく見えても、神の目には良くないことも時にはあります。また、人間の目は誤魔化せても、神の目は絶対に誤魔化せない世界があることを知るべきであります。つまり、この次元を加えて初めてキリスト教主義の教育が成り立つのです。

また、人間として生活していると、どんな立派な人もどうしても犯さざるをえない人間の過ちもあり、早い話が教職員として、自分の愛する生徒のために良かれと思って為した行為でも、そのものが生徒に悪く働く場合があり、それを避ける事は人間として出来ない場合もあります。

そこで、我々にはどうしても自分の愚かさに対する懺悔と自らの弱さや過ちを摘出する力がどうしても必要になってきます。そして、時に人間を越えた次元の力の加護を祈らざるをえない場合がこれからの長い教育の生活の中では一度や二度はあると思います。そんな時に、このもう一つの次元の存在を思い出して戴きたい。

聖書はこのような人間の「愚かさ」について二通り示しています。英語でいうidiotというような馬鹿とfoolとでも表されるような「愚かさ」です。後者は所謂「十字架の愚かさ」というもので、神が自分の子を十字架につけてまで人を愛する愚かさなのです。

そこで考えたいのは、神が貴方を選んだのは、神の本当に賢い選択であつたかどうか、ということです。沢山の志願者の中から貴方を選んだ事は、同志社にとつて賢い選択であつたろうか？ 他人はいざ知らず、私自身について言えば、35年を振り返つてむしろ愚かな選択であつたと思う。なぜなら、神が選ぶべきもつと立派な人もいたのだから。

でも、ここの聖書の箇所にあるように、神は価値あるものを選んだのではなく、もつとも価値のないものをじつは選んだのであります。ここにキリスト教主義教育の鍵があります。やがて、神の力による逆転が起こる事を信ずるこの教育であり、新島はただその生涯をこの神に選ばれた愛に応えようとしたのです。

「我は才力なく、学力なく、先導者となるに足らず、しかれども、我はただ我が日本を愛す、道を愛す、兄弟を愛す。諸君よ、我は、諸君より先生、先生と言わるるを悲しむ。昨年一度、我は諸君の余を先生と呼ぶことなきを乞えり。しかれども、諸君はなお余を先生と呼びたもう。しかれども、我は価なし。ただ神の意に従うのみ。神意ならば、何事をも為さんと欲す。我はただ、日本を愛して事を為す人と、同心なるのみ。同じく神意を奉体する者はこれ一なり。かかる者は世に勝つ。見よ、主は我すでに世に勝てり、と言いたまえり。我も、この主と偕にあり。何ぞ勝たざる事あらんや。諸君よ、もし神の意をなさば、決して破るる事なし。これに、省みる所あれ、今日は、これ最も好き時節なり。もし、この時に際し、事をなして、世を去らば、神の前に称せらるるならん」

（明治18年12月18日 同志社10周年記念会における新島校長演説の一節 新島襄全集第1巻100頁 漢字・かな字に直す。）

これから同志社で出会ういかなる困難の中でも、この愚かさにあえて迫る神の愛が、皆様に豊かに臨むようにこころから祈って止みません。